

岐阜県御嵩町における亜炭鉱跡の埋戻し事業

日時 2017/06/08

調査先 岐阜県御嵩町

報告者 伊藤建治

調査対象 亜炭鉱坑道調査口(御嵩町日枝地区)

当該施設は、御嵩町が、鉱害対策の調査のために、亜炭鉱の坑道の一部を当時のまま保存管理しているもの。坑道内部の当時のままの様子をそのまま見れる貴重な施設である。普段は、一般公開はされておらず、御嵩町の町民や関係者等が希望した時のみ見学ができる。

見学に際しては、安全確保のための装備一式(作業服、ヘルメット、軍手、懐中電灯等)は自前で用意することと、見学時に事故があっても一切の補償しないことを同意する「承諾書」の提出が必要。

入口は炭鉱の入り口であったものではなく、たまたま陥没か何かで生じていた穴をコンクリートで固めて、扉を付けて管理している。



左、調査口へ向かう山道、先に行くのが御嵩町の職員



右 調査口入口

発動機発電機を持っていき、内部の電球を点灯させる。内部で事故があったときに直ちに
対応できるように、外で待機する人を必ず置く。入った人数分のプレートを反しておく。



入ってすぐの空間は、天井高 2.5 メートルほどの広間の様な空間で、2~3 メートルの間隔で、太さ 1 メートルほどの残柱が並んでいる。左右前後、どちらを向いても奥に空洞が続いていて、先がどうなっているのかが見えない。





その空洞の一つが奥まで入れるように管理されていて、そこから内部に進んでいくことができる。

通路として確保された坑道の左右の空間も、壁ではなく、残柱が2～3メートル間隔で残っていて、奥は空洞になっている。その空洞には、ボタ(岩や売り物にならない亜炭)が積み上げられて、通路の壁のようになっている。

岩盤のまま残っている壁面も、残柱も、亜炭層そのもの。良質な亜炭がとても厚い層にて存在していることが良く分かる。

今回内部に入れた空間はせいぜい入口から100mほどだが、そのわずかな空間において、二か所の陥没箇所があった。上から土砂が落ちて、坑道内に山になっている。一か所は、それ以上の土砂流入を防ぐために、土嚢袋が置かれていたが、もう一か所は、陥没したなりのままの状態だった。「地上では、陥没して穴になっているはずだ」、との説明を受けた。

農地や宅地などであれば、鉱害による陥没の復旧は基金にて「特定鉱害復旧事業」として行われるが、山林などの未利用地の場合は、基金事業の対象にならない。そのため、陥没して穴が開いても、開いたままの状態では放置されるとのこと。



陥没箇所。土嚢袋にて土砂の流入を防いでいる。

地上は、山林の間に、狭小の農地がところどころに耕作されており、人が容易に入り込めるようになっていた。決して放置してもよいとは思えないが、内部の果てしなく続く空洞を見れば、対応は難しい事が良く分かる。

調査坑に向かう途中の国道では、国の事業としての予防充填工事が実施されていた。公共性の高い場所から順に安全を確保していく作業が順次進められている。御嵩町で三期にわたり実施された充填工事に 44 億円が必要だったことをみれば、地方自治体が単独で実施できることは難しい。

充填工事、事業概要

南海トラフ巨大地震亜炭鉱跡防災モデル事業(国と県が実施)として実施
事業総額(基金総額)44 億 4444 万円(国 9/10、県 1/9)

計画期間 2014 年(平成 26)3 月～2017 年(平成 29)3 月

地盤の脆弱性が極めて高いと判断された場所において防災工事を実施する。

→具体的には空洞の埋戻し工事。

現在は第2計画区の工事が実施されており、その現場を視察した。

充填工事、事業の詳細

	第1期計画地区	第2期計画地区	第3期計画地区
土地形状	役場、学校グラウンド	民間宅地	民間宅地
埋戻し面積	22,700 m ²	37,570 m ²	9,680 m ²
端部充填工 v	9,937 m ³	78,775 m ³	15,457 m ³
中づめ充填工 v	16,770 m ³	29,361 m ³	6,680 m ³
事業費	13 億円	25 億円	6 億円

春日井市における課題

春日井市においては、まだ、坑道の状況把握すらできていない。春日井市内においても2015年に3回(松本町、出川町、大泉寺町)、2016年に2回(高蔵寺町)、亜炭鉱の陥没が生じている。内部の劣化や、地下水の水位の変動などので、今後も頻繁に陥没が起きることは想定範囲であり、まずは、空洞の分府調査を着手すべきと考える。